



「自己」への相互行為論アプローチ：  
経験的探究に有効な再定式化のために

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-05-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中河, 伸俊 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00004431">https://doi.org/10.24729/00004431</a>

# 「自己」への相互行為論アプローチ

## ――経験的探究に有効な再定式化のために

中 河 伸 俊

「自己 (self)」は、役割や地位、規範、権力、社会統制、集団、組織、制度、社会システムなど並んで、社会学的思考にとって不可欠な基礎概念の一つだとされてきた。そしてそれは、上の他の多くの基礎概念と同じように、この学問領域に共通の語彙でありながら、それが何を意味するかは、じつは論者によってかなりまちまちである。基礎概念についての見解が一致せず、拡散状態にあるおかげで、「わたし」は「本当はどんなものなのか」を論じるゲームとしての自己の理論（いわゆる自己論）を、ほとんど際限なく、悪くすればいっ放しに近いかたちで繰り返し広げる余地が生まれる。多様性こそが望ましいものだという、知についてのリベラルな、もしくはポストモダン的な見方に立てば、これは喜ばしい事態といえるのかもしれない。しかし、こうした現状は、端的に言って、社会学の学問としての未熟さの現れだとみるほうが、より正直な状況認識だと思われる。

筆者はこの間、社会学のいわゆる理論や基礎概念を、それが経験的に調査（観察）可能であるかどうか（中河 2004）を基準にして、手直しし書き換えていくべきだと主張してきた。社会学は二流の「思想」ではなく、固有の視点と方法に導かれた経験的探究であるべきだと考えるからだ。本稿では、そうした大きな指針（あるいは野望？）を頭の隅に置きながら、まず「自己」という概念について若干の基礎的な整理をし、その歴史と在庫目録をごく手短かに振り返ったあとで、それを人びとのいとなみの経験的探究において「使える」ものにするには、どのような方向に進めばよいのかを考える。

以下、(1) 節では社会学の古典における自己論を振り返り、(2) 節では自我（エゴ）と自己（セルフ）の区分を再確認し、それを通じて、ジェイムズとフロイトやエリクソンの議論の位相の異同を点検する。(3) 節で社会学的自己論の一つの基本パターンを作ったと聞いていいミードの所説を見、(4) 節では、相互行為の場のただ中に人びとの自己を据えたゴフマンの「状況に埋めこまれた自己」についての議論が、ミード的な自己観からのどれほど画期的な転換であったかを、ゴフマンの種々の洞察を再構成しながら

確認する。そして、最後の（５）節では、「ゴフマン以後」の「自己」現象への注目すべきアプローチとしてMCD（成員性カテゴリー化装置）分析を挙げ、それを足がかりに自己論の「これから」を展望する。

### （1）古典社会学の自己論

他の基礎概念の場合と同じく、「わたし」をめぐる社会学の議論を特徴付けるのは、多すぎるタームと少なすぎる合意である。試みに、社会学のテキストや初学者も対象にした本から、「わたし」に関連する類縁語をリストアップしてみよう。自己（あるいは自我 self）、自己概念（self-concept、あるいは自己イメージ self-image）、自我（ego）、個人（individual, person → 個性 individuality）、パーソナリティ（人格、性格、個性 personality）、アイデンティティ（自己同一性、自我同一性 identity）、主体（subject, agency → 主観性 subjectivity）、心（精神 mind）、意識（consciousness）、感情（emotion, feeling, sentiment）、実存（existence）、生きられた経験（lived experience）、そして、これらと関連付けられたり対置されたりするかたちで、近年よく論じられるようになった身体（body）や他者性（otherness）。

さらには、こうした語のうちでもっとも基本的なものの一つだと思われる「self」という語が、「自己」とも「自我」とも訳されるという、翻訳に起因する混乱の種もある。もちろん、こうした語の多くは社会学に固有のものではなく、哲学や心理学、あるいはより一般的な常識的思考から借用されたものだ。しかし、それらが、かなり異なった、場合によっては互いに相容れない想定を背後に背負っているにもかかわらず、あまり体系だった吟味を受けず、（それはとりわけ昨今の「質的」な経験的研究に顕著なのが）しばしば寄木細工のようにくっつけられて論述や分析に供されるのを目にするとき、その危うさにしばしば目を覆いたくなる。

では、社会学には「わたし」をめぐるオリジナルな思考はなかったのか。そうであればわざわざ本稿を書く必要はなかった。管見では、社会学はその古典の段階ですでに、（A）「表象としてのわたし」論、（B）「過程としてのわたし」論、（C）「関係の結節点としてのわたし」論という、「わたし」現象についての社会学ならではの議論を提起していた。そのそれぞれの代表的な論者として、デュルケム、ミード、そしてジンメルが挙げられる。これに、パーソンズが自身のシステム理論の足元を固めるために輸入したフロイトの精神分析学の自我の理論を加えれば、社会学における「わたし」をめぐる議論の主だったところは、ほぼ出揃ったといっていだらう<sup>1</sup>。

（A）～（C）に共通の大きな特徴として、「わたし」という現象を、何らかの境界と

独自の性質やメカニズムに裏打ちされた固有の実体とは見えないということが挙げられる。つまり、そのいずれもが、あえてそういう言い方をするなら、きわめて構築主義的な発想をとる（構築主義とは、つまりは社会学主義の別称にすぎないと考える者にとっては、それはまったく意外な話ではないが）。この三つのうちの（C）、つまり、「個人」を糸の交点として捉えるジンメル<sup>2</sup>の発想<sup>2</sup>は、きわめて興味深くポテンシャルに富むもののように思われるが、しかし、この発想にはほとんどその後の展開はなかった。いっぽう、ジェイムズからミード、そしてブルーマーらのシンボリック相互作用論へとという流れのなかで展開した（B）は、社会学的な自己論の代表としての位置を占めることになり、とくに「質的」なフィールド系の研究にとって、重要な導きの糸になってきた。いっぽう、デュルケムの独創的な表象論を出発点とする（A）は、ごく大掴みにいえば、言語学的発想を媒介にして、構造主義、ポスト構造主義、言説分析へとという欧州のいわゆる現代思想系の思潮に継承されてきたといっていいたいだろう。

本稿では、以上のうちの主に（B）の再考と吟味を足がかりにして、社会学的な自己論は、経験的に捕捉可能な「状況に埋めこまれた自己（situated self）」に目を向けるべきだという主張を展開する。しかし、そうした作業に入るまえに、まず、自己（セルフ）と自我（エゴ）という「わたし」現象についての基礎タームをめぐって、社会学者の議論にしばしば見られるある混同を補正するために、若干の交通整理を行いたい。

## （2）自己と自我——予備的な概念整理

プラグマティズム～シカゴ学派～シンボリック相互作用論という（B）の流れの枠内で社会学的な自己論が語られるとき、その創生についての記述の中で、しばしばデカルトのコギトが引き合いに出される。たとえば、船津は、認識主体としての「わたし」と認識客体の「わたし」がともに社会性を帯びたものであることを指摘して、「すなわち、『ワレ思う、ゆえにワレあり』（R・デカルト）というより、『ワレワレ思う、ゆえにワレあり』（C・クーリー）ということになる」と述べる（船津 2005: 4）。また、ホルスタインとグブリアムは、自己論の概説書『私たちが生きる自己』の中で、こう書く。「デカルトは〔あの有名な陳述によって〕、その後何世紀にもわたって、西欧の哲学的論評を実質的に占領することになる、自己の論理上の位置を確立した。『I』と呼ぼうと、『self』と呼ぼうと、デカルトのそれは、哲学的な自己省察を通して姿を現すと彼が主張するような認知的実在（コギト）だった。」（Holstein and Gubrium 2000: 18）。このような「思考の明白な起源」として位置づけられる認識主体としての「わたし」を、ホルスタインとグブリアムは、哲学的な手順を通じて得られた「超越論的な自己（the transcendental

self)』と呼ぶ。そして、そうした自己を、哲学的思考の雲の上から、日常のレベルに引き下ろしたのが、プラグマティスト、ウィリアム・ジェームズの「経験的 (empirical) な自己」についての洞察だったと述べる。

もちろん、「わたし」についての考察を、日常の具体的経験と日常言語の領域に引き下ろして論じようとしたジェームズの功績はきわめて大きいという評価に異議はない。ここで確認しておきたいのは、少なくとも西欧の哲学のターミノロジーでは、『I』と呼ぼうと、『self』と呼ぼうと」といった等置は成り立たないという点だけである。自我 (ラテン語の ego、英語の I、ドイツ語の Ich、フランス語の moi に対応) と、自己 (ラテン語の ipsum、英語の self、ドイツ語の Selbst、フランス語の soi に対応) とは、ことばとして異なるだけでなく、概念としても異なる (酒井 2005: 29-30)。前者が意志や行為の主体、文における主語に当たるものを指すのに対して、後者は自我によって知られたり、自我から何らかの作用を受けたりするかぎりでの自我を指し、したがってそれは不可避免的に、文においては目的語の位置にある。つまり、「自己の再帰的プロジェクト」についての事新しい指摘 (Giddens 1991=2005: 10) を待つまでもなく、自己は定義上、再帰的な存在 (もしくは現象) なのである。デカルトやカントの思索は、もちろん主体としての「I」についてのものだった。したがって、それをホルスタインらのように「超越論的な自己」と呼んではたぶん平仄が合わない。同様に、著名なフロイトの自我/エス/超自我の三要素からなる「わたし」のモデル (Freud 1915-25=1996) も<sup>4</sup>、流体力学的なモデルを使って、固有の境界と仕組みをそなえた実体としての認識主体の深層構造を解明しようとする試み、つまり基本的には自我の理論だったといえる<sup>5</sup>。いっぽう、自己 (Selbst) は、酒井によれば、西洋哲学では 19 世紀の中ごろ、「わたし」を関係の問題として捉えようとしたキルケゴールによってはじめて主題化され、その問題構成は、サルトルら 20 世紀の実存主義者に受け継がれることになったという。

とすれば、しばしば社会学的な自己論の先駆として位置づけられる、ウィリアム・ジェームズの「I」と「Me」(長年「主我」と「客我」と訳されてきた) についての所説 (James 1892=1992-93) は、以上のような伝統を背景に持つ「自我」と「自己」の概念を、統一的に把握しようとする試みだったと考えるのが自然だろう。そうした試みの中で、ジェームズは、「I」と「Me」の双方を非実体化する論陣を張った。まず、人の意識にとっての対象、もしくは客体としての「Me」を、ジェームズは、「考へうる最広義においては、人が我がものと呼び得るすべてのものの総和」(ibid.: 246) だと考える。そこには身体や衣服や所有物のような“物質的”な「Me」、その人が仲間から受ける認識や評価の帰結としての“社会的”な「Me」、そして、自己評価や自己追求のような“精神的”

な自我が含まれる。こうした「Me」は、人の意識に立ち現れる被知のものだという意味において経験的把握が可能だと考えられ、そして、きわめて多元的なものでもある。ジェームズは、“社会的”な「Me」について、「厳密に言えば、一人の人は、彼を認め彼のイメージを心に抱いている個人の数と同数の数の社会的自我をもっている」(ibid.: 250) とさえ極論する。いっぽう、「I」、つまり知者としての自我は、意識する主体であり、そのため「Me」に比べて、「非常に研究困難な存在」である。意識はたえず流動し変化するものであり、同一の状態にとどまってはいる。しかし、私たちは、「I」の背後に何かつねに同一のものがあると考えがちであり、「このために多くの哲学者は経過意識状態の背後に不変の実体、あるいは行為者を仮定するようになった」(ibid.: 273)。「靈魂」や「先験的自我」、「精神」などとして概念化されたりもする、そうした「I」の実体化に、ジェームズは事細かに論駁した。人の意識の連続性は、実体としての主体が存在するというを必ずしも担保しない。私たちは、たしかに、自己および自我(そして自分の「人格」)の同一性の感覚を経験するが、それは、そうした同一性が実際に存在するということとイコールではないし、ましてや、そうした同一性に対応する「わたし」という実体が確固としてあるということの意味しはしない。一世紀以上のちの私たちの目から見れば、古くなった知見や荒削りな論点(たとえば物質的な「Me」/社会的な「Me」/精神的な「Me」というざっくりとしすぎの区分)も含まれているとはいえ、以上のようなジェームズの考え方は、自己をめぐる社会学の議論を、経験的に観察可能な現象のレベルに引き下ろしたい者にとって、きわめて健全な出発点を提供しているといっていいただろう。

以上で確認したことを念頭に置いて、近年きわめて頻繁に使われるいま一つの「わたし」関連の用語、アイデンティティ(identity)についても、手短かに見ておくことにしよう。アイデンティティとは同定(identify)によって立ち現れるもの、くだいていえば、「自分(もしくはあなた、もしくは彼女や彼やかれら)は何者か?」という問いへの答えにあたる何かだ<sup>6</sup>。したがって、明らかにそれは、主体としての自我ではなく、対象化された自己と重なりあう概念なのである。とはいえ、この語を人口に膾炙させるのに貢献したエリクソンの場合(Erickson 1959=1973)、この概念をめぐる議論の構図は、もう少し入り組んでいる。エリクソンは、フロイトの自我/エス/超自我の三項モデルを出発点にしながら、超自我のところどころに集団(社会組織)や文化を代入し、社会的な起源を持つ自我理想(社会学のタームでいえば役割期待にあたるもの)の重要性を強調する(ibid.: 7)。とはいえ、エリクソンがこだわるのは、自我が統一的な実在として「ある」かどうかよりはむしろ<sup>7</sup>、自我アイデンティティ(自我同一性)の感覚、つまり、自らが統一

した人格として存在し、その同一性が維持されているという知覚と感情が保たれるかどうかということだった。そうした感覚が弱まり、「自我の同一性の拡散」(ibid.: 114)が現出するようなライフサイクル上の局面があり、それが、その配置と輪郭が社会的に規定された、たとえば青年期のようなアイデンティティの危機 (identity crisis) の時期だとされる。エリクソンのいう自我アイデンティティの感覚は、半世紀前にジェイムズが縷々考察した、人が経験する「わたし」の同一性についての感覚とほぼ同じもののだとっていいだろう<sup>8</sup>。ただし、エリクソンのジェイムズとの大きな違いは、自我の重要な働きの一つとして、複数の自己のパーツをまとめあげ一つの「自己」に仕上げる強い同一性形成の作用を想定したことである。「意識の流れ」に注目するジェイムズの論理構成では、自我 (I) に多元的自己 (multiple selves) を統一的に捉える働きがあるにしても、それはその時点時点でのその都度的なものであり、その範囲を超えた比較的安定的なアイデンティティ統合 (数多くの自己 = 「Me」 やそれにつらなる諸関係についての認識や知識のかなりの程度持続的かつ整合的な配置) を保障するものではない。なぜなら意識の働きもその内容 (対象) も、時々刻々と変わるものであるだからだ。したがって、ジェイムズの論理構成からただちに、そうした安定的な統合こそが「健全な」自己の与件であり、それが達成されないこと (「同一性の拡散」) が精神の病理につながるという、エリクソンのような主張が導かれることはない<sup>9</sup>。エリクソンのアイデンティティ統合のテーゼについては、あとでさらにゴフマンと対比して触れるが、差し当たりここでは、彼の自我同一性 (ego identity) についての議論は、本人も認めるとおり (ibid.: 197-98)、自我の統一作用 (しかも強い) が大前提になっているとはいえ、結局、さまざまな自己のパーツを一つの統一感のある「自己」にまとめあげることにまつわる議論なのだということを確認したい。つまり、アイデンティティについてのさまざまな議論は、論理構成がやや入り組んでいるエリクソンの場合を含めて、基本的には、自我 (エゴ) ではなく、自己 (セルフ) を焦点化して論じるものだといい。

### (3) 自己の社会化

米国の社会学の自己論の展開を、ホルスタインとグブリアムは、自己の概念が社会化されていく過程として記述する (Holstein and Gubrium 2000)。デカルト以来の「超越論的な自己」(先にこうした言い回しには疑問符をつけたが) から、ジェイムズの「経験的な自己」、クーリーの「姿見の中の自己」、ミード～シンボリック相互作用論の「相互行為する自己」、そして、ゴフマンの「社会的な状況に埋めこまれた自己」へと、「わたし」についての認識は、順次社会学化の程度を深めてきたとかれらは指摘する。



このうちの、のちにシンボリック相互作用論の開祖の座を割り振られることになったミードは、ジェイムズの意識作用としての「I」と意識の対象としての「Me」という構図を一応は継承したが、しかし、そのとりわけ「I」の取り扱いには、ジェイムズからの大きなずれと、概念としてのぶれとがみられる。ミードの自己論への最大の貢献は、他者を決定的なかたちで議論の構図に導入し、「わたし」の社会的起源を「有意味シンボル」を介した他者との相互的で継続的なコミュニケーションを通じての役割取得 (role taking) の帰結として概念化したところにあるとっていいだろう。ミードは、「I」をジェイムズ的な「観察するもの」ではなく、「自分自身の行為に対する反応」として位置づける (Mead 1913=1991: 6)。ミードにとっては、意識の対象として立ち現れる「Me」が、他者と「わたし」との一種の連結装置として位置づけられる。たとえば、「きみはいいやつだね」と敬愛する友人に自分のふるまいを賞賛されれば、文化のおよび関係の背景を伴った「いいやつ」という評価が、「わたし」の意識に顕著なかたちで立ち現れる。「『I』は主役の地位を占めはしない。われわれは自分自身に話しかけはするが、自分自身を見はしない。『I』は、他者の態度を採用することで生じてくる自我に対応して動く。他者の態度を採用すると『me』が登場してきて、その『me』にたいしてわれわれは『I』として感応する。」(Mead 1934=1973: 186) たとえを継続するなら、友人とのやりとりの中で、「ほくはいいやつ」という自分の人格イメージを「わたし」は経験することになるが、それに、内心で「I」が、意想外のつつこみを入れるかもしれない。「いやいや、そんなことはない。ほくは、あの友人の才能にひそかに嫉妬し続けてきたし、あの友人にほめられるきっかけになったあのふるまいだって、じつは、下世話な打算をいささかも伴わないとはいえないものだった」といったように。

つまり、ジェイムズのいう意識の働きの主体としての「I」と重なりあうような何か、意識の対象である「Me」への反応というかたちを取って、私たちの経験 (あるいは awareness) の中に姿を現すと、ミードは考えたようだ。それがミードの「I」概念の主要な意味あいなのだとすれば、それもまた意識された対象 (object) であるから、ミードがいう「Me」と「I」との対話は畢竟、「自己 (self) の劇場」で繰り広げられる内面のドラマということになる<sup>10</sup>。では、そうした「Me」への反応としての「I」を、人は、自分の経験の中で、どのようにして捕捉できるのか。そこで、社会行動主義者ミードが、自分で自分の意識の立ち現れを観察するという行いの担保として指し示すのは、記憶である<sup>11</sup>。「そこで記憶の中の『I』が、一秒、一分、もしくは一日前の自我 [self—中河注] のスポークスマンになる。所与としては『me』しかない。しかし、その『me』は、以前『I』だった『me』である。」(Mead 1934=1973: 186) こうしたいわば時間差による自



己認識は、言語を持たない動物にはない遅延された反応 (delayed response) の能力に基づく、自分自身とのコミュニケーションもしくは「反省作用 (reflection)」として立ち現れる。そして、そのような、彼が創発的自己 (emergent self) と呼ぶものが社会組織を反映した「Me」と対話しつつ立ち働く過程が人の創造性と自由の基盤になり、また、漸進的な社会の変化の源泉 (Mead 1934=1973: 229) にもなるとミードは考える。このロマン主義的といって差し支えない主体主義的な自己観 (および社会観) は、その後シンボリック相互作用論者に継承され (たとえば Blumer 1969: 62-65)、かれらが当時主流だったパーソンズらの構造機能主義の理論を批判するにあたって、重要な足場のひとつになった<sup>12</sup>。

ミードは、クーリーの「姿見の中の自己」を「Me」、つまりは社会的な自己に置き換え、それを他者とのコミュニケーションへと開いて、自己を静態的な「関係」の束ではなく、動的な相互行為過程のただ中に位置づけた。そのことは、社会学への学史的貢献として、どれだけ賞賛しても褒めすぎにはならないだろう。しかし、同時に、その所説にはただ開祖として祭りあげているだけではすまない、いくつもの方法論上の難点や暗礁が含まれているように見える (これは、一世紀近くも前に形をとり始めた所説なのだから、当然のことだ)。たとえば、上述のような主体主義への傾斜という問題に加えて、社会化 (他者の態度の取得から役割取得へと) の過程の説明の中で一般化の取り扱いや、個別的なシンボルを発想の出発点した (つまりは「意味」の構構性についての目配りが弱い) 言語観などは、筆者には大いに気になる。しかし、これらはそれぞれが大きな論題なので、稿を改めて論じることにして、ここでは、本稿のテーマに直結する、ミードの自己論はどのように経験的な観察に対して開かれているのかという一点だけについて、手短かに問題提起をしたい。ミードが、そしてシンボリック相互作用論者がその理論枠組みの中心に置く、人の反省的な過程 (reflexive process) は、どのようにして観察可能なのだろうか。それは、「内省によって明らかにされ、また事実分析がなされるような自我の特性」だとミードはいう (Mead 1913=1991: 2)。ということは、近年、一部のシンボリック相互作用論者がそちらに向かっているような現象学的な内省が、ミードの所説が求める研究方法なのか<sup>13</sup>。しかし、そうだとすれば、ミーディアンの社会学者は、せっかくミードが相互行為過程のただ中に置いた「わたし」の自己を、再びその文脈から切り離すリスクを方法論的に冒さざるをえないことになるのではないか。それに、そもそも、自我 (エゴ) 起源の主体性と内省性を伴うさまざまな自己 (⇔役割) の間の相互行為として社会生活を捉えるというミーディアンの社会学は、「有意味シンボルを介したコミュニケーション」という相互行為概念に課された枠付けも手伝って、じつはそれが批判の対象に

したパーソニアンな構造機能主義と同じくらいに、自他がそこで生活し、やりとりをし、協働し、ときに相克する相互行為とその場について、事実的な具体的特性を捨象した抽象的なヴィジョンしか提供しえていなかったのではないか (cf. 田中 1984)。こう考えるとき、米国で展開した社会学的な自己論の流れの中で、アーヴィング・ゴフマンの仕事が果たした役割の画期性にあらためて気づかざるをえない。

#### (4) ゴフマンの状況に埋めこまれた自己

ゴフマンは、その研究者としてのキャリアを通じて、経験的な観察を足がかりに、儀礼論、ドラマツルギー（演出）論、ゲーム理論、ヒューマン・エソロジー、フレーム分析、言語行為論といったさまざまな切り口を試しながら、一貫して、相互行為秩序の解明を試みてきた。言い換えれば、身体や服装、表情、ふるまいなどの諸表示 (indications) からなる読み取り可能な「見かけ」をそなえた「何者か」として、具体的な社会的活動の場で、「状況に埋めこまれて (situated)」(Holstein and Gubrium 2000: 35-37) 物事を行う人びとの、相互行為的ないとなみの仕組みを明らかにすることに努めてきたのである。ゴフマンが広く知られるきっかけになった『日常生活における自己呈示』(邦題『行為と演技』Goffman 1959=1974) は、単なる演劇（劇場）のメタファーの社会生活への当てはめの試みとしてではなく<sup>14</sup>、人びとが行う「自己」の属性表示の呈示 (=「見せる」、およびそれに不可避的に伴う「見せない」または「隠す」と、そうした「自己」の諸表示の受け手 (audience) による解説 (=「読み取る」、読み取るべきものを探す、そしてときに「目をそむける」という、つまりは自他による「自己」についての「広義の情報」<sup>1</sup> の操作や管理や察知や探索の作業を、日常の社会生活に不可欠の構成的な行いとして位置づけ、それを研究対象にしようという提案として理解すべきなのである。言い換えれば、ゴフマンの登場を待ってはじめて、社会学の自己論の中で、「わたし」は「ある」ものだという考え方から、「わたし」は「する」ものだという考え方への決定的な転換が成立したといえることができる。

外面 (front)、印象操作 (管理)、パフォーマンスのチームと演出、表領域／裏領域、オーディエンスの分離、面子の保護、察しや機転 (tact)、共在 (co-presence) と出会い (encounter) といったよく知られているゴフマンの諸概念は、そのいずれもが、人が具体的な相互行為の場、彼の用語でいえば「状況」の中で、一定の「状況の定義」をリソースにして協働しながら（しかしときに利己的な指し手をその協働に寄生させたりもしながら）、ある「わたし」のあり方を達成するやり方に関わる概念である。人類学的な訓練のバックグラウンドを持つゴフマン（大学院生時代にラドクリフ＝ブラウンの流れ

を汲むロイド・ウォーナーの薫陶を受けた)の調査研究に対するスタンスは基本的に自然主義 (naturalism: Gubrium and Holstein 1997 の2章参照) であり (だからたぶんや露悪的に「素朴実在論者」を自称した<sup>16)</sup>、したがって、自己に関わる現象もまた彼にとっては、自然主義的観察を通じて明らかにされるべきものだった<sup>17)</sup>。そうした立場を堅持するかぎり、パーソンズの有名な二重の条件依存性 (ダブル・コンティンジェンシー) のような、相互行為の初期設定をめぐる机上のバズルに出会うことはない。人は、すでにそこにあるきわめて具体的 (かつ物理的) な「舞台装置」の中に、身体や衣装やメイクや「小道具」などをパフォーマンスのリソースとして使う観察可能な存在として、言い換えれば、「状況の定義」と関連付けながらの読み取りが可能な種々の属性表示 (見かけ) をあらかじめそなえた「情報の搬送体」として登場し、そのようなものとして、他者との出会い (encounter) に入る。したがって、二重の条件依存性の議論において想定されるような「他者についての情報のゼロ点」は、自然主義的観察に立脚する者にとっては、縁のない空論にすぎない<sup>18)</sup>。

米国系の自己の社会学の展開へのゴフマンの貢献は多岐にわたるが、その中でも、とくに重要なものの一つが、『スティグマ』(Goffman 1963=2003) で初めて明確に提示された、パーソナル (= 個人の)・アイデンティティ (personal identity) と社会的アイデンティティ (役割) の対比と、前者の社会的構成についての洞察だろう。これによって、ジェームズに始まる「I」(エゴ) と「Me」(セルフ) の弁証法のそれまで「I」に割り振られてきた部分が、人の「内面」の奥の間から引き出され、経験的観察が可能な相互行為の領野の現象として指し示されたと考えられるからだ。米国系自己論の流れを、そうした見地から再確認すると、ジェームズの多元的自己論では、「一人の人は、彼を認め彼のイメージを心に抱いている個人の数と同数の数の社会的自我 [self] をもっている」という先に引用した命題に明らかないように、「自己 (Me)」は、まわりの他者との関係の束として理解された。しかし、「人はまわりの人からいろんなふうに見られている」という指摘だけでは、特定の人の「自己」の経験的理解にはほど遠い。そのあたりについて、より体系だった考察のスキームを提供したのが、ミードからターナー (Turner 1962) らへと続くシンボリック相互作用論系統の役割理論だった。ミードの社会化の理論の、一つの要になっているのが、一般化という発想だ。人が役割を見につけるいわゆる役割取得 (role-taking) も、個別的な他者の反応の一般化を通じて達成されると考えられている。こうした彼の発想が妥当なものかどうかは吟味の余地があるが (言語ゲーム論の見地からは突込みどころがありそうに思われる)、それはさておき、「男」「女」「子ども」「大人」「若者」「老人」「夫」「妻」「父」「母」「息子」「娘」「営業職の会社員」と

び職」「主婦」「薬剤師」「消防隊員」「ペンション経営者」「名古屋人」「道産子」「イタリア人」「ドイツ人」「黒人」「白人」「東洋人」「仏教徒」「モルモン教徒」「一級建築士」「ノーベル賞受賞者」「フリーター」「暴走族」「オタク」「草野球チームのメンバー」等々々々、性別、年齢区分、職業・職種、社会的身分、家族・親族の中での位置、出身地域、国籍、エスニシティ、社会的タイプ、資格、さまざまな集団帰属や社会的関係などに関わる多種多様な“広義の”社会的役割が、私たちの多元的なアイデンティティの構成要素だというのは、いまでは社会学の定番の説明様式だといえる。しかし、こうした役割の概念には、とくにそれが通俗的に理解されるとき、せつかく社会学が積み上げてきた「構築主義的」な見方を、「主体 (I) の実在」論に押し戻してしまう落とし穴がある。役割を人がつけたり外したりする仮面（ペルソナ）と見る、着脱する衣装のようなものとみる、あるいは、それをあたかも「個人（パーソン）」という大皿に盛られた種々のオードブル料理のようなものとして理解する、というのが、その落とし穴だ。こうしたメタファーからは、仮面の背後の素顔、衣装を着たり脱いだりする「わたし」、あるいは諸役割の盛り皿というかたちで、主体としての実体的な個人が（しばしば「ほんとうのわたし」として）思い描かれる。先に触れたエリクソンの「自我および自己の統合の危機」論も、この盛り皿のたとえを使っていうなら、その上のオードブル料理群にまとまりがなくバラバラだったら、皿全体としての調和と統一性が保てず（自己統一の危機）、それによって皿の存在そのものさえ危うくなる（自我統一の危機）という主張に、社会（人類）学的なライフコース論をつなぎ合わせたものだったといえる<sup>19</sup>。

ゴフマンの『スティグマ』で示した、「かけがえのない個人」のパーソナル・アイデンティティは、種々のアイデンティティ（社会的役割）を引っ掛ける止め釘（identity peg）のようなものなのだという概念化も、一見、上記と同じような発想にもとづくもののように見えるかもしれない。しかし、少し注意深く読めば、まったく違うタイプの議論が展開されていることが分かる。「ある個人の〈かけがえのない〉という概念に含まれる一つの表象は、〈決定的な標識〉とか〈アイデンティティ・ペグ〉（identity peg）とかいう表象であり、たとえば他人の心に浮かぶその人間の写真的心像とか、特定の親族組織における彼の固有の位置に関する知識である。興味深い比較の対象に、西アフリカのトアレグ族の場合がある。この種族の男たちはものを見るためにごく細く開けた部分を残して顔全体を布で覆っている。ここでは明らかに顔の代わりに姿態（ボディ・アピアランス）とか肢体の（フィジカル）スタイルが個人的アイデンティティ同定の投錨点として用いられている。」（Goffman 1963=2003: 100-101）ここで、ゴフマンが論じているのは、明らかに、アイデンティティの同定の問題、つまり、「わたしは、あなたは、あそこに

いるのは……) いったいだれなのか?」という問いの答えに当たるものを判別し、認識するやり方の問題なのだ。「だれ?」という、人についての問いかけには、少なくとも二種類の答えがある。いっぽうに、たとえば「はじめまして、面堂終太郎です」「彼はね、諸星くんっていうんだよ」といったように、固有名を持つ個人のパーソナル・アイデンティティを示すことが適切なやりとりの場面があり、他方に、「警察です、開けてください」や「ただいま普陀落霊園から、新しいお墓のご案内をさせていただきます」といったように、その人の役割=社会的アイデンティティの表示こそが適切な答えになるようなやりとりの場面がある。特急列車の乗客としての私たちは、ふつう、改札に来る車掌の名前など気にしない(たとえその胸に名札がついていても)。ただし、それと同時に重要なのは、気にはしないけど(つまりその車掌のパーソナル・アイデンティティはとくにrelevantではないけど)、しかし、私たちは、その車掌さんが、固有の身体と固有の名前と固有のバイオグラフィー(個人史)をそなえた「個人(パーソン)」だということを、至極当たり前の事柄として想定している。

社会生活の中で「かけがえのない」、あるいは「ほかならぬたった一人の」その人を同定する手がかり(表象)として、ゴフマンは、身体とバイオグラフィーを挙げる(Goffman 1963=2003: 100-101)<sup>20</sup>。固有の名前が、身体的な見かけとバイオグラフィー的な諸情報をつなぎあわせ、その総合的な効果が、ゴフマンの初期の儀礼論のメタファーを使うなら、個人という神殿の奥に「ほかならぬたった一人のその人」という神(もしくは神格)が宿するという感覚を、私たちに与える<sup>21</sup>。しかしながら、そうした同定=同一性の確認の手がかりは、自然の所与ではないし、きわめて安定的なものだとも限らない。周知のとおり、個人の身体的な見かけは(しだいに、しかしときには急激に)変わる。名前は、仲間集団やコミュニティや国家によって担保されて「変わらない」ように見えるだけだし、そして、バイオグラフィーも公式の記録や登録や認定やそれ以外のさまざまな文書によって、個々人のばらばらで、ときにあいまいな記憶の突合せ以上の「客観性」を確保しているにすぎない。言い換えれば、人のパーソナル・アイデンティティの安定性は、かなりの程度まで、それを記録し管理する制度的慣行の安定性に裏打ちされているといえる。しかも、そうして記録され、そして/もしくは記憶される個人のバイオグラフィーは、そのほとんどすべてが、その「人」と結び付けられる種々の社会的アイデンティティの集積と変更とからなっている(これは、一度でも履歴書を書いたことがある人なら実感できることだろう)。

しかし、人には、個性や人格、性格、パーソナリティといったものが、あるではないか。「魂」のような宗教的概念を持ち出すのはさすがにはばかれるにしても、心理学的な

科学性の裏づけがあるらしいこうしたタームが指す個人の内面の何かを、たとえそれが永久不変のものでもなく、「ほかならぬたった一人のその人」の核心として取り扱ってもいいのではないか。筆者の見るところでは、ゴフマンの有名な「役割距離」の概念は、こうした考え方を情け容赦なく突き崩す含みを持つものとして提示されている。彼は、この概念をこう定義する。「個人とその個人が担っていると想定されている役割との、この『効果的に』表現された目立った分離を、役割距離 role distance と呼ぶことにする。それは、以下のような事態の簡潔な表現である。個人は、実際のところ、その役割を否定しているのではなく、その役割を全面的に受け入れているパフォーマーにあっては、役割の一部としてそこに含まれているようなヴァーチャルな自己を否定しているのである。」(Goffman 1961=1985: 115、ただし訳は筆者による) この定義の上っ面を読めば、ゴフマンは、「役割」と「ヴァーチャルな自己」<sup>22</sup>という二つのものがあり、人はときにそのうちの前者に否定的な表出をすることによって、両者の間のへだたりを表現するといっているように見える。そして、そうした理解を前提にして、役割距離を、役割にセットされた社会的な期待や義務に対する個人の側の抵抗や内面的自由の希求の現れとして位置づけ、そこに(限定的なものではあれ)人間の主体性の発露を見るという、主体主義の教理問答(ミードによる「I」の創発性の強調から読み取れるものと論理としては同型の)がしばしば行われてきた。しかし、ゴフマンが何をいっているのか、もう少しよく考えてみよう。ある役割(たとえばこの論文での、上の定義の記述の前にあるメリーゴーランドに乗る子どもの事例でいえば「小さい子ども」の役割)は、その常識的理解に適合的にふるまっても、あるいはそうした理解に距離を置いてふるまっても、どちらの場合にも何らかの「ヴァーチャルな自己」を表示すると、ゴフマンはいっているのだ。役割に同調的に、一所懸命メリーゴーランドの木馬につかまっている子どもは、「ちっちゃい子らしい」「可愛い(!)」自己をそなえていると(本人がそれを意図すると否にかかわらず)とられうるし、いっぽう、横着な態度をとったり、挑戦的なふるまいをしたりして、「僕はやっとな木馬を乗りこなせるような、そんなんじゃないんだぞ」という役割距離の表示を行う子ども(Goffman 1961=1985: 114)には、その表示に即した自己(「もうちっちゃい子じゃない」「お茶目」等々)をそなえているととられうる。まずそこにあるのは、状況に埋めこまれた活動の中での人びと(この場合は子ども)の表出であり、役割(社会的アイデンティティ)を参照点にすることによって、その表出から、その人の自己(パーソナル・アイデンティティ)の有り様について読み取ることが可能になる。つまり、役割は、パーソナル・アイデンティティを抑圧するものではなく、むしろその表示に(少なくとも日常的には<sup>23</sup>)不可欠なものなのだ。これを、役割



と「その人」とは、同時的、一挙的な達成物なのだと言い換えてもいい<sup>24</sup>。そのことは、性格や人格や人柄、「キャラ」、「タイプ」等々、個人の属性とされるものの表示が、どのようにして可能になるのかを考えてみれば明らかだろう。たとえば、見知らぬ自分にニコニコと懇切丁寧に道を教え、孫に案内させてまてくれた親切なタバコ屋のおばあさんは、「見知らぬ人同士」という（役割）関係にあるからこそ「親切な人」として立ち現れるのだし、友だちの悩み事を親身になって聞いてくれず、困っていても救いの手を差し伸べようとはしない友人は、赤の他人ではなく「友だち」だと認識されているからこそ、「冷たい」「薄情な」やつなのである。私たちは、たしかに、社会生活のいろんな局面で、さまざまな役割の「仮面」の向こうに、「とても人間らしい、血の通った、生身のその人」が覗いているのを実感することがある（そして、役割の向こう側の「その人」と会話をかわすことだってまれではない）。しかし、役割の仮面の向こう側に見える「本当のその人」は、状況に埋めこまれた活動の中で、仮面として扱われる当の装置が作動しているからこそ、アクセス可能な現象なのである<sup>25</sup>。

ゴフマンの自己と役割についての議論で重要なのは、役割（あるいは役 part）も、そしてパーソナルな自己も、具体的な個別の状況に埋めこまれた活動の中で、人の実際のパフォーマンスによって具現化されなければならないということだ。役割が「状況の定義」との関連で成り立つものである以上、パーソナルな自己も、ゴフマンが「人とその状況」ではなく「状況とその人」なのだ」というとおり、特定の社会的な文脈を離れて成り立つものではない。しかし、パフォーマンスを行い、またパフォーマンスのオーディエンス（読み取り手）となる行為主体は、もちろん、独自の判断力を持たず価値や規範に操られる存在（ガーフィンケルがいうところの cultural dope）などではなく、「状況の定義」と関連付けて、他者の表出からそのアイデンティティや行いの種別やそれに伴う含みを（しばしば一瞥で）読み解き、それを参照しながら自らの表出と行いを繰り返したり調整したりする。それは、とりもなおさず、私たちが他者の種々の属性（その中には「スティグマ」属性も含まれる：Goffman 1963=2003）を読み解く能力、そして、読み取った属性を組み合わせ、得られなかった属性情報の空白部分を自力で埋めて<sup>26</sup>、他者の「全体像」を思い描く能力を持っているということである。その力のおかげで、私たちは、さまざまなフィクショナルな「人」や擬人存在を思い描き、ときには、神の怒りに怯えたり、小説の登場人物に感情移入したり、歴史上の英雄のファンになったり、恋愛シミュレーションゲームの年上のキャラクターと「対話」しながら「結構本気で萌え」たり「ドキドキ」したりする<sup>27</sup>。そうした場合にも、おそらく、私たちが実在の他者を構成するときに使うのと同じ種類のゲシュタルト構成の能力と方法とが使われている



るといいいだろう。「I」と「Me」に立ち戻っていえば、こうした読み取りと構成の能力を、「I」の創造的作用の現われだといってみても別段差し支えない。しかし、そういったからといって、社会学が、そうした“意識の働き”についての内省的な探究に向かわなければならなくなるわけではない。社会学者が目を向けるべきなのは、むしろ、さまざまな状況に埋めこまれた活動の中で、私たちが、他者や自分を一定のかたちの「何者か」として組み立てるにあたって使う方法のほうだろう。であるとすれば、次節の先取りになるが、ゴフマンの相互行為の中での役割とパーソナル・アイデンティティについての種々の洞察は、「メンバーの方法」をその研究課題にするエスノメソドロジーの分析手法に引き寄せて理解されるとき、いっそうその切れ味を増すはずである。

### (5) 可能な展望——役割論からカテゴリー化分析へ

すでに幾度か引きあいに出したホルスタインとグブリアムの自己論の概説書 (Holstein and Gubrium 2000) は、ジェイムズからゴフマンに至る自己の概念の社会(学)化の流れのあとに、「自己の過社会化がもたらす暗黒面の指摘」と「ポストモダンの自己論」という二つのフェイズが訪れたとする。かれらによれば、そのうちの前者に属するラベリング論 (Becker 1963=1978 など)<sup>28</sup> やホワイトの『組織のなかの人間』 (Whyte 1956=1959)、ホクシールドの『管理される心』 (Hochschild 1983=2000) のような諸研究では、個人のアイデンティティ (自己) やそれに随伴するきわめて個人的な現象であるはずの感情までもが、刑事司法過程やフォーマル組織、感情労働の管理システムなどによって「社会的」に決定される「暗い」メカニズムが、しばしば批判的に描き出される。いっぽう、それに続くポストモダンのフェイズでは、それまでの自己論の一世紀近くの伝統が、御破算にされる。「こうした“ポストモダニスト”は、実在をその表象から区別することができるという近代的な考え方は、幻想にすぎないと主張する。この主張はもちろん、それが望ましいものであれ望ましくないものであれ、経験的な自己にも当てはまる。」 (ibid.: 56)。つまり、ガーゲンの「飽和化した自己」論 (Gergen 1991)<sup>29</sup> や、デンジンの『ポストモダン社会のさまざまなイメージ』 (Denzin 1991) での映画的自己論、ボードリヤールのハイパーリアリティ論 (Baudrillard 1991) などのポストモダン系の著作は、トーンがシニカルか楽観的かの違いはあるにせよ、自己の概念を知的懐疑で洗い直し、それを根無し草の表象の戯れとして描こうとする強い傾向を持っていた。ポスト構造主義というタグとしばしば結び付けられる、自己をディスコースやナラティブ (物語) の束に解消する論じ方も、それとパラレルな (あるいはオーヴァーラップする) 思潮として理解できるだろう。ホルスタインとグブリアム自身は、そうした知的

行の波に乗ることをよしとはせず、言語ゲーム論や語用論、エスノメソドロロジー、フォーコー系の言説分析などを参照しながら、「日常生活の中での自己の構築のテクノロジー」(Holstein and Gubrium 2000: 第Ⅱ部)を経験的につぶさに見るという作業に立ち戻ることがを提言する。

筆者は、この提言に基本的に賛成する。哲学や現代思想や文芸批評を培養基とした各種の「ポスト」の思潮には、往々にして、人びとのありふれた日常のいとなみを(懐疑的にではなく)経験的に観察し、理解(appreciate)しようとする姿勢や努力に欠けるところがある。ポストモダンの浮遊する自己、拡散した自己、あるいは差異の戯れとして現出する自己は、それが、ゴフマンが「状況」と呼ぶような、具体的な人びとの活動(いいかえれば相互行為)の場の具体性から切り離されたところで問いを立てるからこそ見出される現象なのだ。時代は変わった、これまでの(近代の?)自己観ではやっていけない時代になったのだと、「ポスト」論者はいうかもしれない。たしかに、メディアテクノロジーの飛躍的な進展やいわゆるグローバル化などによって、人びとのいとなみが大きく塗り変えられたとあっていい局面はある。にもかかわらず、私たちのさまざまな自己は相変わらず、望むと望まざるとにかかわらず、日常のさまざまな場面での相互行為とその文脈にはめこまれ、ある意味でその効果として現出する。つまり、結局のところ、私たちは、ガーフィンケルがいうところの「不滅の日常の社会(immortal ordinary society)」(Garfinkel 1988)の中で「わたし」を生きることをやめてなどいない<sup>30</sup>。

では、ゴフマンの豊富な(豊富すぎる?)ターミノロジーや試みのあとに、「状況に埋めこまれた自己」の経験的研究の手だてとして、見るべきものが何か登場しただろうか。登場した、と筆者は思う。エスノメソドロジストのサックスの洞察(Sacks 1972=1989; 1974)を出発点とする成員性カテゴリー化分析の展開(たとえば Hester and Eglin 1997)が、近年の自己論のいま一つのブレイクスルーだと考えるからだ。多元的の自己を生きる、社会的アイデンティティを同定(identify)する、役割を具現化するというふうによく表すことができる人びとの行いは、不可避的に、人びとによる「人びとのカテゴリー」の使用を伴う。そうしたカテゴリー使用の方法に焦点を合わせるのが、成員性(または成員)カテゴリー化装置(MC D = membership categorization device)の分析である。この比較的最近脚光を浴びようになった分析の技法には、すでにいくつかの行き届いた紹介があるから(皆川 2002; 山崎 2004; 前田・水川・岡田 2007: 108-120)、ここでは、過去の拙稿から最低限の説明を再録するだけにしたい。

「成員カテゴリーとは、サックスによれば、『男』『女』『親』『子』『友人』『学生』『教員』『弁護士』『オヤジ』『ヤンキー』『多重人格者』『日本人』等々の、人を記述するのに使われ

る分類もしくは社会的類型である。ただし、その適用範囲はのちに拡張され、固有名を持つ会社や団体からより一般的な制度や体制や集合体にいたる「集合体のカテゴリー」も、それが何らかの行いやふるまいをするものとして人びとによって語られ扱われる限りにおいて、同種の分析の対象に含められることになった。[···] MCAの主な道具立てとして、①成員カテゴリー化装置と呼ばれるメンバー（『母親』『父親』『むすめ』『むすこ』）とそれを包含するクラス（『家族』）からなるカテゴリーのセット、②そのスペシャル・ケースである、『妻』と『夫』、『おじ』と『おい』、『加害者』と『被害者』といった、標準化された関係対（standardized relational pair）、③特定の成員カテゴリーにとって適切な、述部的な（predicated）行いや態度や知識や活動（『先生』は『教える』、『八百屋さん』は『野菜を売る』等々）、そして、④成員カテゴリー化にあたってのマキシム（行動原理）である、儉約のルール（ある人びとの集まりのメンバーを記述するには、一つの成員カテゴリーで十分である）と一貫性のルール（ある人びとの集まりのメンバーP1の記述にあたって、ある成員カテゴリー化装置中のカテゴリーMC1が使われたなら、同じ人びとの集まりの他のメンバーP2、P3···のカテゴリー化にあたって、同じ成員カテゴリー化装置中のカテゴリーMC2、MC3···を利用できる）を挙げることができる。ここで重要なのは、成員カテゴリーの集合（成員カテゴリー化装置）やペア（標準化された関係対）は固定的なものではなく、ローカルな人びとの活動の特定の文脈の中で人びとの理解を達成するために使われることによって立ち現れる意味的なつながりだということである。つまり、そうした集合やペアを『文化によってあらかじめプログラムされたものではまったくない』（山田 2001: 199）とみなす点で、MCAは構造主義的な文化の研究とはっきり一線を画する。（中河 2005: 164）。

こうして、アイデンティティや役割といった概念を成員、カテゴリー化に置き換えて理解することによって、経験的な記述や分析の焦点がきわめて明瞭になる。成員性カテゴリー化は、私たちが、自分たちが携わる活動を組織化するにあたって依拠する基本的な方法の一つである。私たちは、社会科学の専門家としてではなく、社会の「ふつうの」メンバーとして、さまざまな人のカテゴリーを理解し利用する仕方を身につけている。そうした日常的な能力を使って、研究者としての私たちは、相互行為の中で人が語ったり行ったりすることを観察し記録し、どのような文脈の中でどのようなカテゴリー化が使われてどんなことが達成されているのかを分析し解明することができる。本稿でたどってきた自己論の流れとの関連でいって、MCDの分析には、いくつかの優れた点がある。第一に、それは、プラグマティズム～シンボリック相互作用論の系統の言語観（たとえば有意味シンボル論）に色濃い、カテゴリーを個別バラバラのものとして捉える傾向を

払拭して、ペアやクラス（部類、もしくは集合）や「述部（あるいはカテゴリーと結びついた活動）」といった一定の構造性を分析に導入していることである。とはいえ、包括的で共時的でリジッドな差異の体系として言語（したがってカテゴリー）を捉えた構造主義の轍を踏んでもいない。カテゴリー化はあくまで文脈依存的でローカルな相互行為的達成であり、したがってそれを有効にするその場の秩序（ゴフマンのいう状況の定義）は、文化や社会の構造にトップダウンで規定されて組織化されるのではなく、その都度的にその相互行為の内側から組織化されて成り立つものだと考えられている。第二に、この分析が拠って立つ調査の方法論（エスノメソドロジー）は、言語の使用についてのしっかりした方法的理解（後期ウイトゲンシュタインやライルなどを参照した）に裏付けられているため、主観／客観や表象／実在、構造／主体といった多くの理論家をどうどうめぐりさせてきた難儀な二分法にわずらわされることなく、「人びとがやっていること」の観察に専念できるという点が挙げられる（中河 2004）。こういう言い方をしたらエスノメソドロジストに叱られるかもしれないが、その方法論は、スーパー自然主義とっていいようなものにみえる。なぜなら、それは、筆者の目には、シカゴ学派などの自然主義のエスノグラフィーに含まれる客観主義と実証主義の想定を、「社会的事実」の観察にあたって言語使用が決定的に重要な役割を果たすという理解（したがって、フィールドで観察の対象となる現象は言語を使った相互行為的な達成物なのであり、観察者は調査対象と同じ言語を使う能力があるからこそその現象にアクセスできるのだという理解）を梃子に解除して、ヴァージョンアップしたものであるように映るからだ。第三に、MCD分析によって、ジェイムズの意識の流れの自己省察やミードの内的対話の内省などとはまったく違ったかたちで、自己や役割についての自己省察をする道が開かれる。たとえば、新聞記事を読むとか、テレビのニュースを観るとかいった（ほかの何でもいいのだが）私たちが日常的に行っている行いの中で、自分がどのようなカテゴリー化によって推論を働かせて理解を成立させているかを、きわめて具体的なかたちで、経験的解明の俎上にのせることを可能にする（Francis and Hester 2004: 3章）。ただし、MCDによる分析は、いまのところ、ゴフマンが目にした、固有名や身体やバイオグラフィーのリンケージとして働き、独自のハイエラキカルな位置価を帯びる（「面子」や「表敬」「品行」）パーソナル・アイデンティティという現象を、まだうまく切り分けることができていないように見える。つまり、ゴフマンの試みは、まだ古びてしまっていない。

MCDの分析は、まだ、エスノグラフィックな研究で、広く使われてはいない。それは、一つには、「研究のデータをつねに読者に点検可能にしておくべし」という、おそらく

会話分析の中で培われたエスノメソドロジーの方法上の約定<sup>31</sup>が、それを文字通りにとるなら、エスノグラファーにとって過重な要求であるということにもよるのかもしれない。思い返せば、この点については、ゴフマンはある意味で悪名が高かった。そのデータの文脈横断的な利用はときに恣意的との批判を受け、『フレーム分析』の冒頭では、そのことについて開き直ってさえいる。しかし、データの利用と提示については、何らかのかたちで、この両極（EMとゴフマン）のミドルグラウンドのようなルールが成り立つ日を、筆者は待ち望んでいる。経験的探究にとって有効な、自己をめぐる現象の社会学的研究を構想するにあたってエスノグラフィックなアプローチは欠かせないし、そして、そうしたエスノグラフィーにおいて、ゴフマンの自己と役割についての洞察と、MCDの分析（およびより包括的で野心的な概念分析：酒井・浦野・前田・中村 2009）は、どちらも欠くことができない重要な資産だと考えるからだ<sup>32</sup>。

## 【注】

- 1 たとえば、ラカンのような現代思想系の議論も、フロイトにデュルケムの表象論に始まる構造主義的（言語派的）な発想を接木したものとして理解できる。
- 2 「[...] それぞれひとつの集団に所属するごとに、個人はさらにまた広い活動の余地をあたえられる。しかし、それが多くなればなるほど、他の人間も同じ集団の組合せを示すであろうということ、これらの多くの圏 [社会圏] がいつかはひとつの点で相まじわるということは、まずありそうもないことになる。[...] すなわち人格は、その起源においては、やはりまた無数の社会的な系の交差点にすぎないのであり、さまざまな圏と適応の時期からえた遺伝の結果にほかならない。そして人格が個性となるのは、種族の要素がどんな量と組合せで人格のなかでいっしょになるかという、その量と組合せの特殊性をつうじてなのである。」(Simmel 1890=1970: 122-123)
- 3 ここでは触れることはできないが、ごく大づかみにいってこの表象論の流れに位置づけられる、フーコーの自己についての系譜学的な議論には、ホルスタインら (Holstein and Gubrium 2000) も指摘するとおり、本稿が取るべきだと考える自己へのアプローチにとって相補的な知見が含まれていると思われる。
- 4 この三項図式のうちの、本能的な欲求であるエスが跳梁するとされる無意識の領野に、じつは社会文化的な起源をもつ「欲望 (desir)」が作動していることを指摘するというのが、たとえばフロムのような、フロイトの社会（科）学化を試みる人たちの議論の基本パターンだといっていいただろう。そうした議論のパターンは、この「社

会文化的なもの」に言語を代入するというかたちで、昨今の「ポスト構造主義的」なフロイト理解にも受け継がれているようにみえる。

- 5 こうしたフロイトの所説に軸足を置いた、しかし自己についての学説史を網羅的に跡づけた近年の労作に、エリオットの『自己論を学ぶ人のために』(Elliot 2007=2008)がある。エリオットは、感情や情動についての考察を、「抑圧」と結びつけた形で自己(あるいはアイデンティティ)論の核心部に据えるべきだと主張しているという点で(そうした事柄についての目配りがなくゴフマンを批判しさえしている)、自我(ego) = 主体についての実体的な議論の、社会学的な自己論への接木をはかる論者の一人だといえる。こうしたエリオットのフロイディアンの部分について、日本におけるシンボリック相互作用(相互行為)論の代表的論者といえる訳者が、邦訳巻末の「解説と訳者あとがき」で明確な評価を下していないように見受けられる点は、筆者には少し物足りなかった。
- 6 ここから、アイデンティティを「わたし」の「存在証明」に関わる事柄としてみる視点が導かれる(石川 1992)。これは、身分証(identification card)といった身近な装置との類比で考えるとき、きわめて納得しやすい視点なのだが、ただ、identification という語は従来、「同定」だけでなく、「同一化(もしくは同一視)」という意味合いでも使われてきたことも、記憶にとどめておく必要はあるだろう。とりわけ精神分析学では、「息子の父親との同一化」といったように、後者の意味での identification が理論の要の位置に置かれた。もちろん、同一化は同定を前提として含まないかぎり成り立たない概念ではあるが、しかしそこにはさらに感情的な固着(attachment) などのようなさまざまな要素が付け加わる。本稿では、identification は同定と訳し、以上のような精神分析的な意味合いを持たない、人びとの認識と対象化の行いを指す語として取り扱われる。
- 7 もちろん、精神医学者であるエリクソンが、それが「ある」というのを大前提にしていることは、さまざまなフロイト系の概念を援用し、たとえば、「自我の損傷」(Erickson 1959=1973: 37) といった事柄について論じていることから明らかなのだが。
- 8 そうした自身の同一性(self-sameness)の感覚の基盤として、エリクソンは、(1) 時間を越えた自分の自己同一性と連続性の直接的な知覚と、(2) 他者もまた自身を、時間を越えて連続的に同一な存在と認知しているという事実の二点を挙げる。このうちの(2)は、ただちに、行為者はどのようにしてそのことを知りうるのかという問いを招きよせると思われるが、それはさておき、ここでのエリクソンの主張の構



成は、一言でいえば、<ジェイムズ+ミード>といった体のものにみえる。

- 9 この点は、のちのミードにも踏襲されている (Mead, 1934=1973: 152)。
- 10 こう理解すれば、ミードが (ジェイムズと違って)、自己 (self) の構成要素として、「Me」と「I」を論じている理由もよくわかる (cf. 「わたしが明白にしたいのは、それ自身にとって対象だという自我の特徴である。この特徴は、『自我』[self] という言葉のなかに現れている。自我は再帰代名詞で、主語 [subject] にも客語 [object] にもなれることを示している。」 Mead, 1934=1973: 147)。さらにいえば、「わたし」の社会的起源という論点を、いわば「売り」として強調したかったミードにとって、「それに先立つ Me への反応としての I」という論理構成は、きわめて重要なものであっただろう。ただし、ミードは、「I」と「me」について、まったく別様に理解できる記述もしている。たとえば、フロイトの「表現を借り」ながら、「I」の作動に含まれうる衝動的な行為について、「Me」が「ある意味での検閲官」の役目を果たすこともあると述べる (Mead 1934=1973: 223)。こうした記述は、「I」をイドに、「Me」を超自我に重ね合わせるという、標準的なミード理解とはかなり違った読みを招きよせることになる。
- 11 こうしてミードが記憶を重視したこと背景は、あるいは、ハッキングの多重人格についての知の考古学の中での、「記憶の科学」についての知見 (Hacking, 1995=1998: 14 章) を参照することによって、より理解しやすくなるかもしれない。
- 12 ちなみに、この構造 vs. 主体の対立の構図や、あるいは両者を「架橋する」という問題意識は、このシンボリック相互作用論者による構造機能主義批判だけでなく、シンボリック相互作用論の内部での論争や、マルクス主義者の間での論争などでも主要な論点として繰り返し論じられてきて、社会 (科) 学における一種の「伝承芸」のようなものになっている。ごく最近も、松田が、日常人類学を提唱する書 (松田 2009) の中で、人類学における構造主義的発想への批判の足がかりとして「創造的個人」に注目することを提唱したが、これもパタンとしては、ミーディアンの主体主義の末裔といえそうである。しかし、筆者は、こうした対立の構図に依拠する議論は、すでに圧倒的に古びたと考える。近年定着しつつあるエスノメソドロジーの社会学がそうしたように、「社会的な秩序は相互行為の内側から／相互行為を通じて組織化される」という理解 (Francis and Hester 2004: 2 章, 11 章) を受け入れるなら、構造 vs. 主体というのはありもしない対立、つまりは、人びとの実際の日常的なとなみの詳細とは別のレベルで組み立てられた理論的な作物だと考えるしかないからだ。



- 13 であるとすれば、グブリアムらが同定した、自然主義（ナチュラリズム）、エスノメソドロジー（構築主義）、イモーショナリズム、ポストモダニズムという質的調査の4つの方法論（Gubrium and Holstein 1997）のうち、ミーディアンの社会学的探究は、現象学的な3番目の選択肢と重なる方向に進まなければいけないということになる。しかし、その線上での成果はけして多いとはいえないし、そしてそもそも、シカゴ学派～シンボリック相互作用論の伝統と関連づけて語られる優れたモノグラフの多くは、じつは1番目の自然主義の方法論的想定に依拠して生み出されたものなのである。
- 14 それだけなら、ケネス・バーク（Burke 1945=1982）で十分だともいえる。
- 15 give する情報ではなく give off する情報（Goffman 1959=1974: 3）。
- 16 これはたぶん、パーソンズのような分析的実在論者ではないということも意味する。
- 17 ゴフマンが、米国の都市人類学（あるいはシカゴ学派的な社会学的民族誌研究）の牙城、『Urban Life』誌（現在の『The Contemporary Journal of Ethnography』誌）にコミットを続けたことは、この点と考え合わせるなら、すんなり合点が入る。
- 18 ゴフマンの「礼儀正しい無関心（civil inattention）についての指摘は、「関係がない」ように見える匿名的な共在場面にも、「関係がない」という社会関係があることを示すものだった。なお、この「情報のゼロ点なんか日常世界にはない」という指摘を方法論的により徹底した形で行ったのが、ガーフィンケルによる、「パーソンズ理論が真空とみなしたところは、じつは無数の相互行為で充たされている」という批判である（ex. Garfinkel 1988）。
- 19 社会学では、このタイプの説明は、「役割葛藤」論として、シンボリック相互作用論よりもむしろ（人類学と社会学の）機能主義の社会理論の流れの中で、いつとき隆盛を誇った。ちなみに、ゴフマンの自己論（および役割論）は、このような個人の「内面」や心理を担保にした役割葛藤の概念とは無縁である。彼にとっては、そうした「葛藤」は、個人の内面ではなく相互行為のレベルでの問題なのであり、言い換えれば、それは、役割の使い分けをスムーズにするオーディエンスの区画化や、受け手の側の「見てみぬふり」等の礼儀正しいふるまいといったこととの関連で、具体的な相互行為の状況と場面を念頭に置きつつ、経験的に検討されるべき事柄なのである。
- 20 ここから、指紋や血液型、DNA 鑑定といった身体的特徴を利用した、より専門的な個人の同定の方法とその歴史（渡辺 2003）へと議論を広げていくこともできるが、煩雑になるので、それは別の機会に譲ることにする。

- 21 こうした儀礼論的な主張は、(1)節でみた古典社会学の三種の自己論の中の、デュルケミアンの「表象としてのわたし」論の発想をダイレクトに援用したものである。ただし、こうした「個別の状況を超えて一貫した個人」という想定は、単なる儀礼的交換のパイプロダクト（あるいは単なる蜃気楼）ではなく、私たちの相互行為を安定的に組織化するために欠くことができない想定なのだという、デュルケムの「近代の個人崇拜の宗教」論を一步前に進めた指摘を、ゴフマンは別のところでしている（Goffman 1974: 288）。個人を、超状況的で持続的なものとして想定しない限り、長期的展望を前提にするような類の相互行為の組織化は困難になる。つまり、持続的で一貫的な「わたし」であれという私たちへの指令は、抽象的な観念の配置ではなく、個々の相互行為のデザインの中に埋めこまれていると、ゴフマンは示唆しているといえる。
- 22 ここでの virtual はこれまで「事実上」などと訳されてきたが、それが“相互行為の中に立ち現れ、その限りにおいて相互行為の参与者にとって読み取りと参照が可能な自己”のことを指すという筆者の理解が正しいなら、「仮想の」はいいすぎとしても、「効力のある」程度の訳が、ニュアンスとして適切ではないかと思われる。
- 23 つまり、心理テストのような専門的な手段を度外視するなら。
- 24 このことについてのより詳細な説明は、『フレーム分析』の、個人-役割フォーミュラの構成要素を考えるというくだりで展開されている（Goffman 1974: 270-273）。
- 25 このことを、表領域と裏領域という、別のゴフマンの著名な概念（Goffman 1959=1974）に引っかけた敷衍することもできる。この対概念を、タテマエとホンネという日本語になぞらえるなら、裏領域こそが、「ほんとうのその人（の自己）」の姿を目にすることができる場所だということになるだろう。しかしながら、ゴフマンは、エヴェレット・ヒューズのモノグラフなどを引いて、裏には、まだその裏がありうるということを示す。では、裏の裏でなら「ほんとうのその人」を目にすることができるのか。そうではないだろう。論理的には、当然、裏の裏の裏がありうるということになる。つまり、裏に「ほんとう」を求めるといのは、“中身”を求めて何もなくなってしまうまで玉ねぎを剥きつづけたサル”の寓話とパラレルな発想なのだ。「ほんとうのわたし」についてゴフマン的に語るなら、サルが剥く「皮」の一枚一枚、つまり、別のさまざまな社会的場面で達成されるすべての「わたし」は、それが表であれ裏であれ、いずれも等しく「ほんとうのわたし」なのだといえない。
- 26 そうやって属性情報の空白を埋める方法のうち、重要なものの一つが、「ふつうの

想定」である。視覚障害者のところへ、面識や予備知識がない人が何かの用事で電話をかけたとき、電話をかけた側は、そのことを開示されないかぎり、相手を「ふつうの」、障害がない人と思いながら会話を続けるだろう。こうした「とくにそうでないのではないかと疑わせるような情報がないかぎりふつうだと想定する」というやり方は、多くの情報が得られない他者の像のゲシュタルト構成に威力を発揮するとともに、「スティグマを有する者」のバッシングの肥沃な土壌になる（Goffman 1963=2003: 126-156）。

- 27 ゲームソフト「ラブプラス」をプレイした若い男性のSNS上の日記より。
- 28 ゴフマンの『スティグマ』は、一時はラベリング論の一翼として位置づけられた（し、いまでもそうした理解をする人はいる）が、その研究関心や分析枠組みは、それとはまったく似て非なるものだった（中河 2006）。
- 29 片桐は「浸された自己」と訳したが（片桐 2000: 215）、こちらほうが適訳だろうと思われる。
- 30 「アイデンティティという近代的概念は賞味期限切れになりかかっている」という上野のメッセージ（上野 2005）に対しても、たぶん、同じようにコメントをすることができるだろう。
- 31 「データが点検できることという[エスノメソドロジーの]第4の原則は、研究者に、メンバーにとっての現象やメンバーの方法が、何らかの形でトークの中に見てとれることを示すようにと求めるとともに、さらに、そうした現象や方法をトークから取り出せるということ、読者が点検できるようにと求める。この原則は、エスノメソドロジーと通常のエスノグラフィーの方法の、根本的な違いに関わるものである。エスノグラフィーによる研究は、その性格上、観察した活動の類型化と要約を、読者に提供する。また、ある見方から、そうした活動に見られるパターンや規則性を明らかにする。したがって、そうしたエスノグラフィーは、調査技法として観察を強調しはするが、観察の詳細を読者が見てとり利用することができるようにはしない。」（Francis and Hester 2004: 31）
- 32 本稿は、大阪府立大学人間社会学部の授業科目「現代社会学A」の、2006年度から2009年度にかけての講義のためにまとめた配布資料の一部をふくらませて論文化したものである。受講し、質問を寄せ、その他オーディエンスとしてさまざまな反応をして、クモのように頼りない考えの糸を紡ぐ私を助けてくれた、上記の授業の受講者の皆さんに、ここで改めて感謝の意を表したい。

【引用文献】

- ・ Baudrillard, Jean, 1991, *La guerre du Golfe n'a pas eu lieu*, Galilée (塚原史訳『湾岸戦争は起こらなかった』紀伊国屋書店 1991).
- ・ Becker, Howard S., 1963, *Outsiders*, New York: The Free Press (村上直之訳『アウトサイダーズ—ラベリング理論とはなにか』新泉社 1978).
- ・ Blumer, Herbert, 1969, *Symbolic Interactionism: Perspective and Method*, Berkley: University of California Press.
- ・ Burke, Kenneth, 1945, *A Grammar of Motives*, New York: Prentice-Hall (森常治訳『動機の文法』晶文社 1982).
- ・ Denzin, Norman K., 1991, *Images of Postmodern Society: Social Theory and Contemporary Cinema*. Los Angeles: Sage.
- ・ Elliot, Anthony, 2007, *Concept of the Self (Second edition)*, Hoboken, NJ: Wiley (片桐雅隆・森真一訳『自己論を学ぶ人のために』世界思想社 2008).
- ・ Erikson, Erik, 1959, *Psychological Issues: Identity and Life Circle*, New York: International Universities Press (小此木啓吾訳編『自我同一性—アイデンティティとライフサイクル』誠信書房 1973).
- ・ Francis, David, and Hester, Stephen, 2004, *An Invitation to Ethnomethodology*, London: Sage.
- ・ Freud, Sigmund, 1915-25, (竹田青嗣編・中山元訳『自我論集』筑摩書房 1996).
- ・ Garfinkel, Harold, 1988, "Evidence for Locally Produced Naturally Accountable Phenomena of Order\*, Logic, Reason, Meaning, Method, etc. in and as of the Essential Haecceity of Immortal Ordinary Society," *Sociological Theory*, 6: 103-109.
- ・ Gergen, Kenneth, 1991, *The Saturated Self: Dilemmas of Identity in Contemporary Life*, New York: Basic Books.
- ・ Giddens, Anthony, 1991, *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age*, Oxford: Blackwell (秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳『モダニティと自己アイデンティティ—後期近代における自己と社会』ハーベスト社 2005).
- ・ Goffman, Erving, 1959, *The Presentation of Self in Everyday Life*, New York: Doubleday (石黒毅訳『行為と演技—日常生活における自己呈示』誠信書房刊 1974).
- ・ Goffman, Erving, 1961, *Encounters: Two Studies in the Sociology of Interaction*, New York: Bobbs-Merrill (佐藤毅・折橋徹彦訳『出会い—相互行為の社会学』誠信書房刊 1974).
- ・ Goffman, Erving, 1963, *Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity*, New York: Prentice-Hall (石黒毅訳『スティグマの社会学—烙印を押されたアイデンティティ (改

- 訂版)』せりか書房 2003).
- ・ Goffman, Erving, 1974, *Fame Analysis*, New York: Harper & Row.
  - ・ Gubrium, Jaber F., and James A. Holstein, 1997, *The New Language of Qualitative Method*, New York: Oxford University Press.
  - ・ Hacking, Ian, 1995, *Rewriting the Soul: Multiple Personality and the Sciences of Memory*, Princeton, NJ: Princeton University Press (北沢格訳『記憶を書きかえる—多重人格と心のメカニズム』早川書房 1998).
  - ・ Hacking, Ian, 1999, *The Social Construction of What?*, Cambridge, MA: Harvard University Press (出口康夫・久米暁訳『何が社会的に構成されるのか』岩波書店 2006).
  - ・ Hester, Stephen, and Peter Eglin (eds.), 1997, *Culture in Action: Studies in Membership Categorization Analysis*, Washington, DC: University Press of America.
  - ・ Hochschild, Arlie Russell, 1983, *The Managed Heart*, Berkley: University of California Press (石川准・室伏亜希訳『管理される心—感情が商品になるとき』世界思想社 2000).
  - ・ Holstein, James A., and Jaber F. Gubrium, 2000, *The Self We Live By: Narrative Identity in a Postmodern World*, New York: Oxford University Press.
  - ・ 石川准, 『アイデンティティ・ゲーム—存在証明の社会学』新評論 1992.
  - ・ 船津衛, 2005, 「認識する私」井上俊・船津衛編『自己と他者の社会学』有斐閣 pp.4-20.
  - ・ James, William, 1892, *Psychology: Briefer Course*, Henry Holt & Company (今田寛訳『心理学(上・下)』岩波書店 1992-93).
  - ・ 片桐雅隆, 2000, 『自己と「語り」の社会学—構築主義的展開』世界思想社.
  - ・ 前田泰樹・水川喜文・岡田光弘(共編), 2007, 『エスノメソドロジー—人びとの実践から学ぶ』新曜社.
  - ・ 松田素二, 2009, 『日常人類学宣言!—生活世界の深層へ／から』世界思想社.
  - ・ Mead, George Herbert, 1913, "The Social Self", *The Journal of Philosophy, Psychology, and Scientific Methods*, 10: 374-380 (「社会的自我」船津衛・徳川直人編訳『社会的自我』恒星社厚生閣 1991).
  - ・ Mead, George Herbert, 1934, *Mind, Self, and Society*, Chicago: The University of Chicago Press (稲葉三千男・滝沢正樹・中野収訳『精神・自我・社会』青木書店 1973).
  - ・ 皆川満寿美, 2002, 「相互行為と性現象—エスノメソドロジーからのアプローチ」伊藤勇・徳川直人編著『相互行為の社会心理学』北樹出版 pp. 141-159.
  - ・ 中河伸俊, 2004, 「構築主義とエンピリカル・リサーチャビリティ」『社会学評論』219

号 (55 卷 3 号) 2004: 244-259.

- ・ 中河伸俊, 2005, 「逸脱のカテゴリー化とコントロール」 宝月誠・進藤雄三編『社会的コントロールの現在』世界思想社 159-173.
- ・ 中河伸俊, 2006, 「相互行為場面におけるスティグマ—排除と包摂をめぐる感受概念の経験的有用性と実践的インプリケーション」『スティグマの相互行為的マネジメントと文化的構成の研究 (平成 16 ~ 17 年度科学研究費 (基盤研究 (C)) 研究成果報告書)』大阪府立大学人間社会学部社会学研究会, pp. 1-18.
- ・ Sacks, Harvey, 1972, "An Initial Investigation into the Usability of Conversational Data for Doing Sociology," in David Sudnow (ed.), *Studies in Social Interaction*, New York: The Free Press, pp. 259-279 (北澤裕・西阪仰訳「会話データの利用法」G・サーサス他『日常性の解剖学—知と会話』マルジュ社 1989, pp. 93-173).
- ・ Sacks, Harvey, 1974, "On the Analysability of Stories by Children," in Ralph H. Turner (ed.) *Ethnomethodology*, Harmondsworth: Penguin, pp. 216-232.
- ・ 酒井潔, 2005, 『自我の哲学史』講談社.
- ・ 酒井泰斗・浦野茂・前田泰樹・中村和生 (編著), 2009, 『概念分析の社会学—社会経験と人間の科学』ナカニシヤ出版.
- ・ Simmel, Georg, 1890, *Über sociale Differenzierung*, Duncker & Humboldt (居安正訳『社会分化論・社会学』青木書店 1970).
- ・ 田中滋, 1984, 「『他者』の論理構造—物象化論と役割論の対話をめざして」『社会学評論』139: 349-365.
- ・ Turner, Ralph H., 1962, "Role Taking: Process Versus Conformity," in Arnold M. Rose (ed.), *Human Behavior and Social Process*, London: Routledge & Kegan Paul, pp. 20-40.
- ・ 渡辺公三, 2003, 『司法的同一性の誕生—市民社会における固体識別と登録』言叢社.
- ・ Whyte, William H., 1956, *The Organizational Man*, Garden City, NY: Doubleday (岡部慶三・藤永保訳『組織のなかの人間 (上) (下)』東京創元社 1959).
- ・ 山田富秋, 2001, 「成員カテゴリー化装置分析の新たな展開」船津衛編『アメリカ社会学の潮流』恒星社厚生閣 pp. 189-210.
- ・ 山崎敬一, 2004, 「エスノメソドロジーの方法 (1)」山崎敬一編『実践エスノメソドロジー入門』有斐閣 pp. 15-35.